

## ウイグルのマシュラップ

藤山 正二郎

**要旨** マシュラップは中央アジアのトルコ系民族に、イスラム以前の古くから伝わる集団的な祝い、娯楽の習慣である。収穫が終わる晩秋から、春の耕作が始まるまでの間に行われる。音楽、歌、踊り、冗談、詩の朗読などがその内容である。収穫祭という意味を持ったマシュラップもあるが、特定の目的を持った祭りというよりも、断食月の終わりなど、各種の祝い事に伴って行われることも多い。一応の組織的役割分担もあり、規約なども存在する。若者のマシュラップへのイニシエーションもあり、すべての人が参加できるわけでもない。人民公社や文化大革命の時代は中断していたが、改革開放以後の文化復興の波に乗ってある程度は復活している。しかし、民族運動の集会と誤解され、政府から中止されたこともある。マシュラップはウイグル人社会に古くから存在する自発的結社として、日本の「講」にも似た組織である。講と同じように、宗教的、経済的、親睦的など、多様な機能を担っている。柔構造的な組織なので、時代とともに、またウイグル自治区の地域でもかなり相違がある。

**キーワード：**ウイグル、マシュラップ、講

### 1. はじめに

マシュラップという言葉をはじめて知ったのは、2001年の夏、ホータンである。いつものように、調査のあいまに、中心街にある新華書店に立ち寄り、本を探していた。そこに古本のような画集が置かれてあった。少し破れているところもあるが、ウイグルの自然の風景、人物、社会の姿が写実的に描かれ、役に立つこともあるだろうと買い求めた。ウイグルでは多くの書店で見かけることだが、新刊に混じって、古い本も置いてある。この画集も1993年発行だから、かなり古い本である。

アブドシュクル・ケリムがその画家の名前で

ある。1949年、東新疆のハミで生まれ、新疆芸術学校を卒業している。その画集のなかに「ハミのクック・マシュラップ」があった。ほぼ、中央に伝統的な服の女性が「青い新芽の麦」を盆に載せ立っている。犠牲にする羊を持つ少年がいて、演奏する人もいる、周りを多くの男女が囲んでいる。「クック」とはウイグル語で「青、緑、緑の牧草、新芽」などを意味する。ノルズ節という春の祭りの中で行われることから、麦の新芽を祝うマシュラップである。ノルズとはペルシャ語で春の最初の日を意味し、日本での春分の日に始まる祭りである。ダンス、歌、競技、食事などを楽しむ、イスラム以前か

ら中央アジアに広く存在する。

1年後、ウルムチに住むケリム氏に会うことができた。「今は、あのような写実的な絵は描いてなくて、抽象的な絵、またはアラビア文字の書画をしている。自分の絵はコムル（ハミのウイグル名）のレストランの壁画で残っている。クック・マシュラップは小麦の種まきを祝うもので、祖父母の時まではしていた。中華人民共和国になっても存在していたが、人民公社、文化大革命の時代になくなった。絵に出てくる服装は唐の時代にコムルに入ったもので、今はアトラス模様が多くなっている。」最近、このマシュラップを復活させて、ビデオ撮影をしたとのことで、これを見せてもらった。この儀礼のなかにカラスが悪者で出てくる。にわとりを取るのである。ウイグル人には芸術は欠かせない、苦しいときも歌やダンスをよくすると話されていた。

## 2. マシュラップとは何か

いつも調査しているホータンで聞いても、マシュラップは何かおめでたいことがあるとみんなで祝い、踊り、歌い、食事すること、としか答えが返ってこない。後で知ったことだが、ホータンは比較的マシュラップは薄い地域であった。マシュラップはアラビアの「千夜一夜物語」に出てくるほどだから、イスラム以前から広く行われていた古い習慣である。ただ、あまりにも日常的な祝いであるため、歴史的文献などにも断片的に出てくるだけである。元来、マシュラップ (mashrap, mashrab) もしくはメシュレップ (meshrep) はアラビア語で「酒を飲む場所」の意味である。

次の記述は1913年、クチャで断食月のあける祭りで、毎晩のように行われたマシュラップの

様子を表している。<sup>(1)</sup>アクサカルの庭園が大広間で行われた。老婦人、若い娘、若い妻と夫、未婚の若者たちがすわっている。弦楽器のドタール、タンバリンのようなダープからなる楽隊がいる。お茶、氷砂糖、ナン、果物が出されている。ダンスは一人、または数人の若い男女によって、組んで踊られる。男女が組んで踊る種類のダンスは、イスラムの場合違和感を覚える。おそらくこれらのダンスはイスラム以前の古い時代の名残なのであろう。また、ダンスのほかに若者たちが扮する「牝牛」や「馬に乗った男」の道化芝居が演じられる。このおどけた怪物が分厚い唇で、前のほうに座っている若い女の一人からキスを奪おうとすると、観客の喜びはさらに大きくなる。さらに、チリムと呼ばれるダンスは、常に女性の側から相手を所望するダンスである。妻が観客としてこのような祭りに参加することはべつだんかまわないが、ダンスに加わることは特に上流階級の人からはしたくないこととされる。

では、現在のウイグル人はどのようにマシュラップを考えているのであろうか。アメリカ在住のウイグル人団体が「メシュラップ・コム」というインターネット・サイトをつくっている。それによると、農民による収穫の祝いとなっている。踊り、歌、冗談、詩の朗読などが出し物である。中央アジアのトルコ系民族の間で秋に行われる。マシュラップに若者が入るためには、父親に連れて行ってもらい、カジ（審判）からの要望を聞き、マシュラップの成員の承認をもらう。メンバーがマシュラップの規則を破ったなら、その人は面白いやり方で罰を受けることになる。年上の人への悪口を言う、酒を飲むなどはその罰の対象となる。マシュラップはウイグルの伝統的な娯楽的集まりである。<sup>(2)</sup>

その伝統的なマシュラップをウイグルの民俗学者からの抄訳で見てみたい。

### 3. マシュラップの民俗誌

#### ① マシュラップ・バザム(娯楽、祭り、宴会)<sup>(3)</sup>

マシュラップは強く民族的であり、広範な大衆が持つ特別なもの、これはウイグル人たちの民族的精神の特別に輝かしい表現、音楽、踊りであり、野外での教育的意味をもつあらゆる種類の特別に面白い出し物が演じられ、大衆的なものである。マシュラップの出し物はパターンによって、同じようなレベルのマハツラの特徴を持っている、種類は多く、名前もあらゆる種類がある。たとえば、ドラム・マシュラップ、メイリシ・ケイト、青い(種まき)マシュラップ、トイ・マシュラップ、娯楽といわれるようなもの。このほかに、ヘイトーバイラムをするときの宴の宵や親しい人とのチェイ(dinner party)、別れのチェイ、謝りのチェイなどのようなマシュラップの特徴を持つものもある、この宴の宵のマシュラップもある。このマシュラップの中にはドラム・マシュラップ、トルパンやコムル・マシュラップ(メイリシ)、青い(種まき)マシュラップでの楽器の演奏、歌と踊りが基本に行われる。付加的な条件は喜劇的特徴をもつあらゆる種類の出し物が演じられる。ほかに楽器の演奏、歌と踊り、機知に富んだ話、チャクチャク(冗談)が基本になっている出し物が演じられる。

ドラム・マシュラップは普通、年長の狩人、生業活動が反映している4つの違う「仕事の踊り」が基本の踊りが行われ、男女の集合で演じられる。トルパンやコムル・マシュラップは「帯の踊り」が基本の踊りとして行われる、1つの集団になり、招く形が演じられる。

集団の娯楽のマシュラップ、座って楽器の演奏、面白話—チャクチャクとあらゆる種類の娯楽が演じられるのが基本であり、それに踊りが加わり、自由に踊ることができる。

このマシュラップ—バザムは宴の宵であり、楽しく過ごすことを保証する組織された1組の「規則」と「スタッフ」がある。この規則とスタッフはマシュラップの参加者とともに相談して、構成し、選ばれる。この相談—規則はマシュラップ参加者のよい道徳である。よい品格の友達を持ち、規律、道徳心を導き、鼓舞するマシュラップである。マシュラップの「スタッフ」はイギット・ベシ、カジ(カーディー)、パシャップ(巡警)、…などと称される。マシュラップの参加者は通常「オットズ・オグル」と称される、もし「スタッフ」のカジが能力がないとしたら、オットズ・オグルはすべての時間をかけて、残された他の者を選ぶ。「規則」の重大な違反をしたらオットズ・オグルは次々と追放される。この「規則」には、マシュラップに遅れる、理由なく出てこないと追放される、また、誠実、興味のある行い、年長者への尊敬、年少者の保護、婦女への無用な冗談の行いなど次々と条項に含められている。

マシュラップは毎年、晩秋の初めから春の種まきまで行われ、路地で遊び、20—30人を超える。このために、ひとつのマハツラの趣向について話し合う一組が作られる。伝統的な習慣によって、18歳以下は参加できない。マシュラップの参加者はそれぞれの種類で変わる、マシュラップは毎年、再度組織される。改新する「選挙」が行われる。その年のマシュラップはまず自分の種類のチャイを行うことによって、もしくはオットズ・オグルが順に新しい一人の男、若者を加えるために、この若者が行ったチャイに

よって、はじまっていく。登録された一人の男の青年は、マシュラップの参加者自身が守る規定を与えられる。それは名誉な仕事といわれる。それゆえ、この若者の両親は子供のために1頭のオスの家畜をささげ、オトツズ・オグルの食事の布、ダスティハンを敷く。

② 30人の男のマシュラップ：<sup>(4)</sup>

ウイグル人が住むあらゆる土地に、マシュラップは広く存在する。内容が豊富で、組織的な制度を持ち、体系的である。それは「30人の男のマシュラップ」(オットズ・オグル・マシュラップ)と呼ばれる。

「30人の男のマシュラップ」はイリ地方のウイグル人たちのローカルなマシュラップであった。それは参加する範囲は男たちだけであり、限られたマシュラップの名前と儀式であった。だが、マシュラップはそれぞれの種類の集団の儀式組織を司る大衆の組織の名前となり、このため、「30人の男のマシュラップ」はあらゆる郷(エザ)に広がった。あらゆる村(キャント)―マハッラに「30人の男のマシュラップの組織」がある。

③ 「30人の男のマシュラップ」の組織：

マシュラップのベギ(カーディー、裁判官)、イギット・ベシ(若者頭)、ダリガイ・ベギ、コル・ベギ(会計)、サクチ(警備)などその他の役人がメンバーで集められている。かれらはそれぞれが1つの自身の役割がある。

マシュラップのベギ(カーディー)―「オットズ・オグル・マシュラップ」では最も高い地位の称号である。かれによってマシュラップすべてのプロセスが取り仕切られる、マシュラップの法的側面をあつかう。

イギット・ベシ―マシュラップの基礎の組織となる、マシュラップの活動のリーダー的な役割をおこなう。

ダリガイ・ベギ(ダラ・ベギ)―基本的にマシュラップの特徴である活動と歌、踊り、音楽などが割り当てられている。それゆえ、ダリガイ・ベギはこの村(キャント)で歌や音楽がうまい、技能の高い人を選んで、決めていく。

コルベギ―マシュラップのすべての費用、経済的なことを司る。普通、マシュラップはすべてうまくいくように、コル・ベギがそれを決める。マシュラップはコル・ベギの指示にしたがって実行される。

サクチ―マシュラップの規律を司る、普通は「公安」が責任を持つ地位である。マシュラップの規則―制度を破るものを暴く、警備は直ちにマシュラップ・ベギと若者頭に通知する。また、罰を実行する責任がある。マシュラップの参加者はサクチが司り、それに無条件に従う。サクチは手にふつう「花の枝」といわれるむちを持っている。「花の枝」は柔らかい柳の枝かシモツケソウで作られる。罰の執行を直接的にする警官はその「花の枝」によって軽く打つ。

「30人の男のマシュラップ」のメンバーになるには数に制限がある。だが、1つのマシュラップの組織は30―40人ぐらいである。「30人の男のマシュラップ」のメンバーであることとは地域に住んでいることである。

④ マシュラップへのイニシエーション：

最初に、マシュラップに参加したいという若者は父にマシュラップに連れてもらう。サクチはこのことをマシュラップ・ベギと若者頭に伝える。許可をもらうため、若者の父はマシュラップのメンバーのまえて、子どもがマシュラップ

のメンバーになりたいという願いを伝える。マシュラップ・ベギと若者頭に「子どもの骨はわれわれのものである、肉はあなたの方のものである、礼儀や道徳を教えてください、それがマシュラップにつれてきた理由だ」という。若者頭は子どもにいう、「このマシュラップには優しいことも、きびしいこともある、耐えうるものだけに許可が与えられる。」そのあと、子どもは「耐えます」と答える。このようにして、マシュラップへの許可が与えられる。このとき、マシュラップの人々は、この子が何を持ってきたらよいか知っているかどうかを尋ねる。子どもの父は「30人の男の繁栄」と答え、何頭のらくだ、何頭の馬、牛、羊、を持ってきたらよいか良く知っている、と答える。実際にそのふるさとの家畜の名前がマシュラップ全体のシンボルの名前となる。らくだとメロン・スイカ、馬とたまご、牛もしくは羊、それとりんご、などが選ばれる。この贈り物は警備が選んだあとで、マシュラップの範囲で配られる。その贈り物に同意したらマシュラップは受け入れる、この若者自身、一定の1つ以上のことを、「30人の男」で最初に指示されて誓う。もし、どんな特別なことができないなら、1つの動物か、1匹のオスの鳥がさえざるのをまねしなければならない。同時に、子の父親は男のマシュラップに加えられ、荣誉ある「30人の男」の家のマシュラップに招待される。

若者頭はこの新しいメンバーをマシュラップに加え、「30人の男のマシュラップ」のルールの体系を知らせる。マシュラップのメンバーとなって初めての人には「マシュラップ」の集合体の許可が得られることが必要である、そして、参加の許可がなされる。もし、マシュラップを引退する人があれば、理由を「30人の男」に納

得のいく説明をする、自分がいた理由は、若者の面倒を見ることだったと行って、よく知っているマシュラップを2回したあとで退く。

#### ⑤ マシュラップの内容：

「30人の男のマシュラップ」にはほかの土地と似ている歌—音楽や踊りがある、冗談や自慢話、マシュラップのゲームや罰、などのステージがある。それぞれ1つのステージの内容は大変幅広く、重厚な芸術のようである。

「30人の男のマシュラップ」の規則や制度の違反のために、与えられる罰は2種類あり、1つは経済的な罰、もう1つは過失の罰である。経済的な罰は本当の罪として重い—軽いと経済的な状態をかんがえてする、最も重い経済的な罰は「30人の男の繁栄」のために自分の番のほかに1回、「謝罪のマシュラップ」をしなければならない。軽いのは次の回のマシュラップのためにすべての種類の果物、砂糖、お菓子のようなものを用意しなければならない。

過失の罰は多くの罰がある、「サムサ(ナンの肉まん)を焼く」「ジュワズ(油絞り)をひく」「羊の肺に小麦と脂肪を詰める」「結び目を造る」「2人の女性を連れてくる」「カッコウの鳴き声」「キジバトを飛ばす」「ウサギをける」「かぼちゃを割る」「むちの禁止」「恥を忍ぶ」「水に入る」「顔にすすを塗る」「庭のりんごを摘む」などおかしいことである、ユーモラスな遊びである。この罰はカクチが決め、訴えを行う。

「30人の男のマシュラップ」は基本的に秋の収穫に集まり、始める。次の年の春の耕作まで続く。

「30人の男のマシュラップ」は4つの段階の催し物をおこなう、また、それぞれの回で、集まったマシュラップのメンバー—いくつかの重要なこ

とを議論し、計画を考える、このふるさとの民衆（ジャマアート）のことについて相談し、考える。トイ（儀式）－祝いも死も－を導き、家族の状態を尋ね、助け、解決する。このように、「30人の男のマシュラップ」はふるさと－共同体の権威と名声を高める、このふるさとの人々はこのマシュラップ集団と親しくまとまっている。

要するに、ウイグルの「30人の男のマシュラップ」は民俗の「芸術・アートの学校」と「礼儀－道徳のゆりかご」である。このように、他の種類の公衆のマシュラップ、儀式の組織や援助を広げている。

#### ⑥ マシュラップの出し物 (show : play)

ウイグル人たちのマシュラップの活動は、たくさんの種類の内容に表現され、それらには芸術的習慣、歌－踊りがあふれ、マシュラップに「命をよみがえらせる」多様な民俗の出し物がある。この種の出し物は必要な状況に応じて、マシュラップで演じられ、それらは「マシュラップの出し物」といわれる。

マシュラップの出し物は基本的に2つのパートからなる：1番目は、マシュラップで決められたもので、マシュラップの意味に関する伝統的な出し物である。それぞれ、なんらかのマシュラップ（特にドラム・マシュラップ）でいくつかの音楽－踊りをしたあと、音楽演奏者と踊り手は休んでそしてマシュラップの雰囲気さをさらに高めるため、「若者頭」が鑑定した「むちの演技」「ベルトの演技」「茶を開始する演技」「詩－バラードをうたう」、そのような出し物が行われる。この出し物はそれ自身の特別なルールがある、マシュラップの人々のだれかが最初する。そのあと、はじめの人はだれかに願い、この人

の役割の出し物が継続する。ちらっとみると、「茶を開始する演技」でAという人が、1つの茶碗のミルクなしの茶を右手で大変軽快に一周、一回りの婦人（小さいカップに茶を少量つがなければならない）に与えた後、1つの2行詩とともに茶を自分の好きなBという人にわたす。この人がカップを受け取る、そのあと、その場から消えてそして、Aという人が始めた順序に従って、カップをまわす、手際よく、3番目は別の1人に渡す。このようにして、遊びを続けるのである。若者頭とマシュラップ衆は遊びを監督するのである。もし、だれか手のカップをまわす途中で茶を落としたら、あたらしい「罰」が加えられる。この「罰」はマシュラップの人々の要求で何か代替りの物を与えるか、自分の周りにいた1人の男のプログラム（歌を歌う、家畜の真似をする、他の人を自然に笑わせるような男の道化の演技をするなど）の代替りをする。それゆえにマシュラップの参加者に茶のない「空の手」がくることがある、このようにたぶん心の準備が必要である。

それよりさらにドラム・マシュラップにはドラマの特徴をもつあらゆる種類のおかしい出し物がある。たとえば、泥棒を非難して「チェスト泥棒」の出し物、貿易キャラバン「らくだの出し物」、役人の仕事を皮肉る「アンバン：清の時代の役人、の出し物」、不道徳ものがばかげたことをする「おじいさん」、「ライオン」、「2匹のねこがおろかな言い合い」、など喜劇のエピソードの出し物である。

マシュラップの出し物の2番目の群は「罰の出し物」などである。マシュラップは自発的な大衆の活動であるが、昔から、それはひとつのまとまった伝統のしきたりである。このしきたりはマシュラップの規範と秩序を保証する「マ

シュラップの基本の法」であり、しきたりを破るもの、「若者頭」からの判断に従わない人、そして女性への不品行をする「罰へひきだされる」、この罰はマシュラップの人々に笑いをもたらす、そして厳しく教える。「サムサを焼く」「印をつける」「2人の女性がやりとりする」「油絞り機をひく」「羊の肺に小麦粉と脂肪をつめる」「塊を造る」「頭を下げる」など名がつけられている罰の特徴を持つユーモアの出し物などである。この罰マシュラップのルールーきまりを破った人がわかると、警備（マシュラップの秩序—規律に責任をもつ）が乗り出してくる、「若者頭」に報告したあと、若者頭の権威のもとに、訴えがなされる。もし行為が重大ならば、マシュラップから追放ということになる。マシュラップの罰を受けた人は共同体の権威を傷つけるから、すべての人がマシュラップの伝統的な規則—きまりを意識して尊重する。ここにはウイグルのマシュラップが長い間、持続的に続いた理由がある。

要するに、ウイグルのマシュラップと民族的芸術は発展して、そして礼儀—道徳の学校である。

#### ⑦ ケイト・マシュラップ

ケイト・マシュラップ—東新疆ウイグルに広く散在するマシュラップである。「ケイト」は「判決を下す」、「決める」という意味がある。

いわば、「ケイト・マシュラップ」は本質的に「判決を下すマシュラップ」である。人々の間では「ケイト・マシュラップ」はもともと「殺すマシュラップ」（死の罰が与えられる）が変化した形といわれる、それぞれ2種類のマシュラップの特徴的なプロセスに一致している。

ケイト・マシュラップには2種類のパターン

がある。1つは範囲が狭いカタール（順番）マシュラップのパターンである。もう1つは、儀式で少女が来たあと、儀式が夕方から次の日の夕方まで1日続くケイト・マシュラップである。儀式の名誉あるベギのこのマシュラップは範囲が広く、内容が豊富である、100—200人が参加する。このマシュラップは単に儀式であり、若者と少女と一緒に友達を招待する。客は座る場所の絨毯、フェルトのようなマットレスをひろげる。そのとき、それぞれ3人の若者の最初の1人が短い脚のテーブルを置く。マシュラップの席の主なマシュラップ「王」のために1つの大きな丸いテーブルをおく。席の右手側にはもう1つ丸いテーブル（シラ）をおく。これは「カーディー（裁判官）」のために用意された席である。規則に拠れば「王（パイディシャ）」は若者集団のマハツラからで、「カーディー」になるのは少女集団のマハツラから用意される。

イギット・ベシ（若者頭）の客たちの男、女友達を席に招き、マシュラップの役職に今日のマシュラップを動かす人の名前の候補者をあげる。

多くの人が相談し、大衆のやり方が決められ、マシュラップ全体のリーダーシップをとるパイディシャ、ワジル（大臣）、カーディー、ムフティー（イスラム法学者）、バザール・ベギ、コル・ベギ（ハズナ・ベギ）、アングザ（刺激）、お茶売り、編む人（パトヌス—皿を編む人）、キカスチ（掛け声をかける人）が順に選ばれる。そのあと、コル・ベギが、儀式進行を準備する、あめなど甘いものがすべてのひとのテーブルにおかれる、30の皿が揃えられる。このような事のあと、マシュラップの進め方について「パイディシャ」は命令をバザール・ベギかアングザに告げる。少女たちに関しては、マシュラップの中に入る準備をはじめ、秩序ある集団を作る。年

取った人たちは周りを見て、マシュラップの監督をする。

ケイト・マシュラップは4つの段階に分かれる：

第1の段階、パディシャの命令が発せられたあと、ナグラ（太鼓）—スナイ（笛）の2、3の音楽がはじまる、それが最初、2番目、3番目、4番目のマシュラップが行われる。歌一踊りがやむことなく続く。最後には、音楽が静かになったあと、別のだしものが終わる。

第2の段階、ひとつのドラ（説教—小冊子）といわれる、あらゆる種類の笑う出し物が始まる。最初、ひとつのドラの出し物の過程で、パディシャの命令を破るトラブルに、気づいたマシュラップの役職はパディシャに話し、非難する。これによって、マシュラップ・カーディーは「罪人」に本当がどうかを尋ねる。尋問の結果、パディシャの命令がなされたあと、パディシャの命令のあと「罪人」が決定され、罰か別の種類の罰が与えられる。カーディーは「罪人」の帽子をとって、死の罰を宣告する。それから、罰のマシュラップが申し渡され、商人の3、4の皿の菓子を取り、作法と名誉によってパディシャに渡される。「罪人」は低くなって、罪を認める。パディシャは罪を許す、アンギザにそのあとで罪が渡され、アドバイスをし、帽子をとる。罰を受け入れず、反対するとマシュラップから追放されることになる。ある人は「羊の皮をむく」「このしるしをつける」「サムサを食べる」「はとを飛ばす」「大きな器に冷たい水を入れる」「浸された棒」のような罰を受け、そして、ほとんどが笑いをさそう冗談がいわれる。この種の「罰」は全体のマシュラップで面白い状況で、笑える出し物などである。この段階の終わりにはもう1回、ナグラ—スナイが現れ、その

あと歌一踊りが最高になり、ムカムが低くなって終わりになる。

第3の段階、おかしいことをする人たち、とおしゃべりをする人（ほら吹き）が中心に現れ、それぞれのほら吹き合戦が、マシュラップの人々を笑わせる。また、何人かのおかしいことをする人が「41の嘘」のような笑わせる物語を話す。この段階は大変面白いことが行われ、また、ナグラ—スナイの伴奏があり、歌と踊りで終わる。

第4の段階、パディシャとカーディーが承認したあと、アンギザが疑問をなげかける、従うよう声明を出す。質問をするひとはまず30の皿に砂糖—御菓子を持ち上げて始める、カーディーの前に出たあと、質問を始める。なされた質問にカーディーとイスラム法学者は相談し答えを出す。答えは真剣になされ、マシュラップの人々は拍手をしてそれを認める。もし答えが真剣なものなら、カーディーは他の人に質問をするようにし、9の皿にお菓子—甘いものを持って、それぞれに10回くわえる、すべてで90の皿にお菓子—甘いものを返し、自分のカーディーの席に質問をするマシュラップが始まる。それはまた再び2回目のカーディーが評価を投げかけるときである。それゆえ「ケイト・マシュラップ」でカーディーがすることは、このふるさと—マハツラを啓蒙することである。機敏と賢さが若者たちの心から出てくることである。なされた質問の内容は民衆に関係する知識—科学、算数、なぞなぞと言葉の出し物などである、たくさんなのぞなぞへの答えを考える機会となる。

質問—答えが終わり、またもう一度、ドラの出し物が演じられる、最後の「面白い音楽—踊り「ケイト・マシュラップ」の別のマシュラップ

プの特徴、それは最後の段階の知識—科学はそれぞれの種類の内容の質問—答えの形によって、自然環境を大衆に理解させることなどである。

#### ⑧ クック（青）マシュラップ

新疆の農業地帯の収穫の後、開かれる昔のお祭りや儀式である。第一に「苗のマシュラップ」（中央アジアの古代文化に関係した起源をもつ「民族の祭り」と言われる）があり、これはクムル、ピチャン、トルパンなどの東新疆のウイグル人のなかで今まで続いてきた。この儀式は今クムルで「クック・マシュラップ」といわれ、ピチャン地方で以前の名前では「ミス・マシュラップ」「苗の出し物」と呼ばれていた。

「クック・マシュラップ」は境界的な特徴を持っている、これは毎年11月に始まる、次の年の春まで続き、特定の時間の儀式の日によって限定されている。「クック・マシュラップ」は直接農業生活から借りてきたものである、クック（苗）になるのを待ち焦がれ、豊作となるよう、クムルの人々はマシュラップをする。

「クック・マシュラップ」には比較的以前の習慣（仕方）のようなものがある：手洗いの壺の頭を取って、花びんのように、きれいな状態にして、このなかに土をいれ、手のひらに1、2杯の小麦か大麦をまく。小麦が発芽して苗になったあと、それぞれの種類の飾りによって、この大きな道具があたかも美しい女性、少女に似てくる。これは「クック」といわれている。クックの準備をする主催者はまた、干しぶどう、オルク・カク（干しアプリコット）、干した桃、ナツメ、グミ、メロンの種、干したりんご、干したメロン、大豆など9種類の干した果物（枝）を1つの皿に準備した状態（串）になった食事を準備しマハッラの人と親しい人を招き、夕方

のマシュラップが組織される。マシュラップの終わりに苗の心を引く1つの「クックの詩」が読まれる。同時に、苗を渡す人が準備して、喚起する踊り「クック・マシュラップ」開かれる。このようにされる「クック」をあの手この手に渡し、周期的な状態で回され、春の植え付けの初めまで、「クック・マシュラップ」が絶えることなく続く。苗を渡す人はこの名誉でかならずマシュラップを行い、マシュラップの組織の「クック」を丁寧に育て、枯れて倒れないようにしなければならない。クック・マシュラップでは参加者は愉快で興奮し、笑い（娯楽）のなかで「私は1本の矢を射る」という、もう一回「私は1本の矢を射る」…「私は3本の矢を射る」と言う、次の回のクック・マシュラップが開かれるときが決められる。1本の矢を射ると明日の夕方、2本の矢を射ると明後日の夕方、このようにしてクックは冬に回される、自分の持ち回りが来る次の春の相談をする。要するに、クック・マシュラップを誰が組織するか、作法によってまた自分に回ってくる。クック・マシュラップの参加者の数を考え、集める。

「クック・マシュラップ」を世代から世代へと継承する過程をきめるこの様式が豊かになって、さらに安定した。現在に従うと、昔の伝統の型は失われる。今の型では小麦の苗を冬の日には家の壺に、鉄もしくは陶器に一束にして芽を出す、オスとメスの鶏の形を美しい赤の紙で切り抜く、それを一つ一つ、苗の中に立てる。その周りにもまた赤い花をさして、とうもろこしの囲いが立てられる、雪に見立てた小麦粉を苗にふりかける。それから、クックは赤、緑のサテンによって飾られ、その上をスカーフで覆う。クックが芽を出したその主人は1つの生地、食事と9の皿のドライフルーツを用意する。同時に、15-

20の男女のペアがよばれ、「クック・マシュラップ」が始まる。マシュラップの双行詩を造る人、詩人、キカスチ（ハイーハイと掛け声を言う人）、このような人たちは、特別な招待がなされる。ギジャク奏者、ラワップ奏者、ダップ打者、などの音楽家が決められ、席に座る、5人の同じ年の若者に与えられた席に、5人は座る。マシュラップは夜どうし続き、終わりに、顔を覆うクックの苗と1つの布の服がだされ、9つの皿のすべての種類のドライフルーツを用意し、主人役の男女の2番目の1組の男女は詩を2つ披露する。この間、音楽家たちは音楽をやめ、マシュラップの人の注意をその中心に向けさせる。クックを渡すホストたちは、おかしい話によって双行詩を始める。男の主人役は「冬一厳しい冬にあらわれるにんじんは、春の始まり。すばらしい腕前で花が咲く冬…この花は信頼によって評判になる、そして確実に咲く花への貢献が評判になる。花の陰にすわりこころは動く、花を手に入れた人はまず微笑みはじめる、花を育てすばらしいものになる、それぞれの人生を思い出し、主人はキスをする」という、女の主人役は「あのアラーの力は第一にこの苗を緑にする、王マンリックが発芽が色づくときに届けた苗、少女テワナは座った姿が黄金の苗。その姿が黄金の苗の力をスルタンまで届ける、月の顔の光は新しい花まで届く。冬の苗の芽が出るのはやさしいことではない、この出し物を演じるのは私たちや私ではない。この話はつくりごとであるが、ひとつだけは作り事ではない。苗を育てて、喜びを得る、静かにしておく、高い棚においておく、感情全体が休まる、高い高い家で成長したら脱穀する、苗が渡され、わたしたち、穏やかに眠る、この世のことはすべて中断し、止まる、あひるが30羽、羊が30頭、すべ

と一緒に準備し、幸運がある、心のネックレスは1組の既婚の女が準備する、鎌を渡す、ラワップ、カルン、サタールを準備する…」といった。マシュラップの人は「オー、ありがとう」、「アラーに幸運あれ」といって、苗を渡す人を祝福する。種まきをする男女のマシュラップの人々は、世話した人を朝晩、自分の家のマシュラップに招待する。それから、男女は2つの苗を手で持ち上げて立って踊る。キカスチは皿、お盆にあらゆる果物をもってあらわれる、席で踊りをする人はくるくる回る、「乾燥した一枯れた、家畜のわら、ひとつの家族が踊る、まるで花のようだ」といって、キカスチは合いの手を打つ。

主人が1つの盆のアトラスーサイ（シルク・サテン）を持ち上げて手に取る、大小の客たち、歌い手たちは頭の向きを変え、「ジョワプツ、ジョワプツ、ハイ、若者よ、ブラボー、キカス」という。みんなも回って「ブラボー、キカス」と一緒に言う。喜びの頂点は高くなる。マシュラップの人々は青い苗をしっかりとつかんで、家で歌や音楽をしながら、植え替える。

#### ⑩ ドラン、マシュラップとドランの踊り<sup>(5)</sup>

ドラン・マシュラップは基本的に、マキット、マラルベシ、ヨップルガ（テリム村）、アクス・アワット、シャヤルのタリム河岸の村のような郡一地区のウイグル人の間で行われている伝統的な芸術活動の一般的な名称である。ドラン・マシュラップ自体は古いものである、散在する範囲は広い、活動内容は多くの種類があり、別の地区にはウイグル・マシュラップの違うものも残っている。

ドラン・マシュラップは一般的にドラン・ムカムに忠実といわれ、組織された大衆芸術活動である。その音楽、歌とおどり、あらゆる種類

の儀礼的出し物、と冗談を相互にかけあうことがその内容である。それゆえ、それは「大衆の芸術学校」といわれてきた。

ドラン・マシュラップ活動の中にはすべてのおかしいことと、意味のあるドラン・ムカムの伴奏、集団の踊りの動きなどがある。ドラン・マシュラップの集団の踊りの動作は、昔の世代が狩猟をしていた時代の仕事、基本的には4つのステージの踊りのそれぞれのパートが考えられている：第1の舞台は「チキットマ」があり、最初、ムカム（プロローグ）であるが、実際は結局、マシュラップの人々、男女のカップルがメロディのよい音楽の音のなかで英雄のように、確固としたステップに従って、ゆっくりと踊っていく。男たちは手を変えて右左と振っていく。右にも、左にも女がいる。右半分の女は一時的であり、最初、右足から3つのステップを踏み出す。3番目のステップは右足の半分で回る、左の足の先はまっすぐで止まる、左足は直ちに位置を変える、右足の動きの方向に従って繰り返しが続く。この主導する踊りの動きはあたかも狩人がうっそうと茂った森で、密な茂みを2つの手でゆっくり引っ張り、狩の動物を探す、生き生きとした情景を映し出している。

ドランの踊りの「チキットマ」2番目の舞台は「踊りの音楽」が変わる、踊りのリズムが変化する、動きも早くなる。踊り手たちは次第に広がっていく。男女は手を口まで持ち上げて、ペアで寄り添って、軽快に右と左が対応するステップに従って、完全な円を作る。このステージはとてもスピードがある。踊る人たちが軽快に前後に動く、左右に転回する、手の前でジェスチャーの動きは、動物を追って鋭く捕らえる情景を見せている。

ドランの踊りの3番目の舞台は「サリカ」を

する、この舞台の踊りはそこにいるすべての人がゆっくり、ゆっくりと1つの大きな輪を作っていく、踊りはその輪の形のサークルの線に沿って続いていく。この状況は狩猟者が集まって動物を囲む光景を描いている。

第4ステージ「シイルマ：乳牛」、この段階の音楽のリズムにからみながら大きい円の範囲が分かれていくことから始まる。これとともに踊り自体も前後に回転する、

要するに、ドラン・マシュラップではドランの踊りが複雑に精巧に表現されている。

マシュラップには若者や農民、年寄りのマシュラップなどがある。年寄りのそれは宗教的であり、若者は自由である。農民は収穫後、小麦の豊作を祝う。マシュラップの内容は宗教と関係がある、社会の発展、時代とともに変化する。人数はオトツズ・オグル（30人の男）といっても、決まっているわけではない。大勢の人という意味である。マシュラップは団体ではなく、メルシャップという秘書のような人が、どこでやるか、みんなに知らせる。マハッラ、郷、単位、ホータン地区のようないろいろな範囲で行う。マシュラップに遅刻したとか、悪いことをしたら、イギット・ベシがリーダーとして罰を与える。お金ではなく、冗談で犬の声、歌を歌う、蛇のようにくるくる回る、杏を食べさせるというような罰である。そして、みんなを笑わせる。イギット・ベシの選び方は、偉い人、尊敬される人、学者、知識を持つ人などが選ばれる。罰を受ける行為は、人前でパンツを脱がない、年上の女性に冗談を言わない、タバコを他人の前ですわない。参加できるのは結婚した若者だけであり、結婚しない若者はだめである。見るだけで、参加できない。16-18歳で結婚す

る。

年寄りのマッシュラップは、50歳以上である。宗教的で、古い本をよむ、健康に良いことをする、歌や踊りはする。楽器もする。リズムがゆっくりである。冬にすることが多い。ホータンの歴史や、この薬がいいとか健康について話し、友達同士で集まる。いまでもメロンができたといっちは集まる。20日に一回、家を変えて、レストランでも、果樹園でもいい。同じ年の幼なじみがほとんどである。互いに病気見舞い、葬式に行く、結婚式にも行く。同じ考えだけの人が多い、政治の話はしない。噂話もしない。7時間ぐらい続く。費用はイギット・ベシがもつ。奥さんが得意な料理でもてなす。そこにきたら偉い人もみんな平等である。

農民のマッシュラップは収穫が終わったときする。畑でも、家でもいい、学校でもいい。する季節は、3月か4月で、緑が見える春の季節が多い。会社がスポンサーになって、1万人が集まって、バクチ郷でマッシュラップをしたことがある。男も女も行って、互いに知り合う良い機会である。<sup>(6)</sup>

#### 4. 日本の講との比較

主にこれまではマッシュラップの内容、生のデータを記述してきたが、「講」との比較をするために、その概略について述べる。講は自発的結社として、古くからあり、組織的にはマッシュラップより明確である。祝いのとき、踊る、歌うなどの、娯楽的要素は見られない講もある。講もその機能は多様であり、種類も数多く、存在する。

##### ① 宗教的講<sup>(7)</sup>

もともと、講は仏教の教えを説く集まりとして始まったものであるから、宗教的な講が多い

のは当然であろう。民俗的宗教の山の神講、水神講、田の神講、船霊講、氏神講、また、広範囲な信仰団体の神道系：御獄講、仏教系：観音講、薬師講、地藏講、浄土真宗：報恩講、日蓮宗：身延講などがある。霊山信仰の参拝講として、恐山講、筑波山講、富士山の浅間講、熊野三山講、石鎚講、英彦山講などがある。有名な神社仏閣に参拝する講として、伊勢講、善光寺講、大宰府講、宇佐講などがある。職業の守護神を祭るための講もある。鍛冶や牧牛業者の荒神講、牧馬や馬車業者の馬頭観音講、大工などの太子講、漁師のえびす講などである。

##### ② 社会的講

社会的講は地域の共同生活が反映し、相互扶助による契約講、労働力交換のゆい、モヤイ講、年齢別の子供講、若者講、老年講、葬式組の無常講、性別によるカカ講、娘講、尼講など、がある。

##### ③ 経済的講<sup>(8)</sup>

金品の融通をはかる目的でつくられ、頼母子、無尽、模合と呼ばれ、融通する品目により、米頼母子、船頼母子、馬無尽などがあつた。相互扶助的な金融方式であり、一定の口数を定め加入者を集め、一定の期日ごとに各口について一定の出資をさせ、1口ごとに抽選または入札によって所定の金額を順次加入者に渡す方式でお金を融資するものである。明治以降に新しい銀行制度が確立されたが、一般の人々の間では質屋や無尽が多く利用された。しかし、資本主義の発達により、無尽も会社組織で経営するものが多くなり、戦後は整理統合され、相互銀行になった。

このような講は日本全国に存在しているわけではなく、ひところの農村社会学でいわれたように、日本には同族結合の東北型農村と講組結

合の西南型農村の2つの類型がある。西南日本に多い講組結合の農村は、「家」意識が薄い。講の組織原理が示しているように、東北日本の本家・分家関係のタテのつながりに対して、ヨコのつながり、自発性、平等が重要視される。本題からそれるが、西南日本にはウイグルに多い「末子相続」も見られる。

また、マシュラップには加入するには年齢制限があり、また年寄りだけのマシュラップも存在する、男だけのマシュラップもある。これは、ある種の年齢階梯制的なことを想像させる。年齢で社会を構成するのは平等的な原理である。これは、日本の若者組、年寄り組などの年齢階梯制と似ているところもある。そして、年齢階梯制はまた、西南日本に多いのである。

## 5. おわりに

本論はマシュラップの民族誌的な記述を中心に展開してきた。イスラム社会はイスラム教だけで解釈されがちであるが、イスラム以前からウイグルに存在するマシュラップは、彼らの共同性を理解する上で、重要な文化である。マシュラップについてはそれほどの調査研究もなされていない。資料不足ではあるが、次稿ではウイグル社会のいろいろな側面に登場するマシュラップについて分析する予定である。

## {注}

- 1) A・フォン・ル・コック (羽鳥重雄訳)、東トルキスタン風物誌、1986 (1928)、白水社、141-143頁。
- 2) <http://www.meshrep.com/>
- 3) アブドラーム・ハビビュラ、ウイグル民族誌、新疆人民出版社、2000 (1993)、443-446頁。(ウイグル文)

4) アブドゥケリム・ラフマン、ラワイドゥッラー・ハムドゥッラー、シェリブ・ホシユル、ウイグル風俗習慣(ウイグルラル・ウルパアデティリ)、1996、新疆青少年出版社、141-147頁 (ウイグル文)。

5) 同上、192頁。

6) 以上は2004年9月のホータンでのフィールドノート。

7) 桜井徳太郎、講、平凡社世界大百科事典、1998。

8) 齊藤博、無尽、平凡社世界大百科事典、1998。